

無料のサウナ 1 民族地理学から 1

(や＝山田 学)〔☆★無料のサウナ★☆☆  
☆パリ・オリンピックにおける、日本人選手  
の活躍に、感謝いたします。

さて、毎日の体感の、話。

都会では、室内・車内の冷房により、室外・  
車外の空気を温めることに、これ努めていま  
す。街路を歩くと、“無料のサウナ”状態  
です。都会人のこの切実な体験をもつて、「地  
球全体が温暖化してゐる証拠だ…」と判断  
するのは、誤りです。それを言ふなら、「都会  
の室内・車内は、人為により着実に、寒冷化」  
してゐます。扇風機しか無い、まだ冷房機が  
普及してゐない昔には、かういふ都会現象は、  
ありませんでした。

☆☆民族地理学から☆☆今のGAFAM  
や世界経済フォーラムなどの行動から、「グ  
ローバリズムは、悪いものではないか。」と  
する論調も増えてゐます。その論調には確か  
に、根拠があります。

が、GAFAMや世界経済フォーラムなどから  
は、まったく離れ、逆に、〈諸民族の自立と  
協同〉を保証する方向の、健康平和な地球表  
面統一なら、むしろ歓迎すべきではないでせ  
うか。われわれの〈超近代開拓運動〉は、後  
者をめざすのです。

〈諸民族の自立と協同〉を保証するには、む

ろん、民族学ないし民族地理学についての、  
本格理論が必須です。幸ひ、日本社会には、  
川喜田二郎師(1920～2009)による、次の著  
などが、準備されてゐます。

『素朴と文明』(講談社学術文庫1989年)

<https://www.honyaclub.com/shop/g/g10585468>

『環境と人間と文明と』(古今書院1999年)

<https://www.honyaclub.com/shop/g/g11432837>

『野性の復興デカルト的合理主義から全人的創造  
へ』(祥伝社1995年)

<https://www.honyaclub.com/shop/g/g11083861>

ここでは、川喜田師による原理的ご主張を、  
わたしの立場から、整理し直させていただき、  
述べさせていただきます。

＊

各民族は、地球各域の気候風土や生物系の特  
殊性に、対応し適応しつつ、生活し生産して  
きました。それにふさはしく、家族から国家  
までを組織しつつ、言語や宗教などを発展さ  
せてきました。この、気候風土から宗教まで  
の全体系を、民族生態系、と呼ぶことにいた  
します。

われらが〈超近代開拓運動〉は、〈諸民族の  
自立と協同〉こそを、めざします。そのため  
に、諸民族の伝統を、なるべく、実証的かつ  
本質的に、ふりかへります。

さうしてさらに、〈諸民族生態系の必然を、  
相互尊重する社会〉、これを創造するのです。

各民族の自民族からは、絶対的な、各宗教や、  
各言語的世界観についても、相対化させてい

たきます。

それらは、人間が地球各域へ、適応し分化し  
た、〈各民族生態系の結果〉としての、各宗  
教や、各言語的世界観である。さう理解して、  
相対化させていただきます。

さて、人間は、永遠に、小集団の愉しさを、  
大切にしたい生物です。

そこから、各種の社会主義・共産主義(コン  
ミュニズム)なども、発想されたのです。  
が、「個人がある小集団の愉しさに帰属する」  
のみでは、また、「さまざまな楽しい小集団  
の寄せ集め」のみでは、結局、何万人何億人  
の協同社会が、実現しないのです。

まことに残念ながら、人間社会はまだ、この  
最重要問題を、解決してゐないのです。あの  
マルクスを含めて、です。川喜田二郎師から  
の、この問題提起を承け、山田 学は次のや  
うに、思索し、情念いたしました。

この問題解決には、次の三方向の追求が、必  
須です。

①〈生理本位の諸個人の自立と協同〉を、追  
求する。

②そもそも、この数千年間の、諸国家の攻防  
の時代を、終末へと推進する。その代りに、  
個人の生体・情感・情念・思考を、健康平和  
に保護し推進する、さういふ、社会の組織な  
いし制度を、追求します。その究極は、地球  
公会といふ組織ないし制度、です。

③①の新しい個人原理確立と、②の新しい制  
度原理確立の、あひだにてこそ、やうやく、

〈さまざまな楽しい小集団の、区別と連関〉  
が、実現できてゆきます。

この①②③が、われわれの〈超近代開拓運動〉  
です。その端緒を、次に表明いたしました。

(JOMONあかでみいサイト「店頭」画面内)

〈はるかな健康平和への祈り〉

ひとりひとり迷ひの近代から脱出する提案

表紙 [http://www.jomaca.join-us.jp/inori\\_fine.pdf](http://www.jomaca.join-us.jp/inori_fine.pdf)

本文 (7枚)<http://www.jomaca.join-us.jp/inori.pdf>

さて、〈超近代開拓運動〉といふ問題解決こそが、現代人の新しい生きがひ、ではないでせうか。

山田 学は、超近代を開拓させていただきま  
す。今までのわたしの人生のあらゆる特異な  
ご縁、その結果としての、山田 学の義務な  
のでございます。]

(〈はるかな健康平和への祈り〉本文5ペ  
より) […部族国家発生後、この数千年間  
の地球、すなはち、諸民族闘争などの、特  
異な時代を、相対化する、平和性の原点  
が、日本民族には、あるのです。日本民族  
の伝統を、反省し、諸民族の自立と協同へ、  
仲介のあり方も、創造します。今からの超  
近代にて、西欧民族を相対化し、日本民族  
が仲介し、諸民族の自立と協同を、追求す  
る。この追求を、縄文風平和、と呼ぶこと  
にします。…]

(や) [日本民族の伝統を反省することも、川  
喜田師に学べます。

川喜田師著『素朴と文明』の「第二部 日本

誕生——生態史的考察——」は、日本民族の成  
立史について、実に興味深い、総観です。

北方からの刺激、すなはち大陸のアムール川  
(黒龍江)あたりからの、影響。南方などか  
らの海上の道において、また、日本列島内の  
河川において重要な、水界性の船・舟の文化。  
日本民族の成立史について、これら2点を、  
今の日本知識人は、見落しがちである。そし  
て、とくに663年の白村江敗戦以降、陸界性  
の騎馬軍を、どのやうに強化したか。

落合莞爾先生の

『京都皇統の解禁秘史天皇とワンワールド』(成  
甲書房2015年)

<https://www.honyaclub.com/shop/g/g17387170>

などにも学んだわたしは、川喜田師による日  
本古代史理解に、全面賛同しかねるところも  
ありますが、それでも依然として、実に興味  
深い、総観なのです。

そして川喜田師の東南アジア観にこそ、注目  
すべし。(ただし以下の引用文章は、日本の  
バブル崩壊より前に、書かれてゐる。)]

(『素朴と文明』文庫版208～209ページより)[…  
倭人をもって日本列島だけの人びとと考えるのは、根本的錯覚ではないか。彼らは水界稲作民のことなのだ。その水界稲作民ないし倭人は、ひとつの大なる文化的伝統なのだ。その伝統はアジア種の稲の栽培化と共に、アッサム＝雲南地方で発生した。そうして東南アジアの大陸の河川や海岸や島々を含み、中国の華南・華中の海岸部・

河川から朝鮮西南部、さらに日本の西半部  
にまで広がったのである。日本はいちばん  
遅く倭人伝統圏に入った部類かもしれない。

これがひとまとまりの広大な倭人圏だと見えなかったのは、文化をうんぬんするような知識人が、たいてい陸の視点からのみ水界を見るくせをつけていたからである。その色メガネないし偏見のために、水界による統一性が見えなかったのである。事態を公平に見るためには、陸界・水界の両視点を併せた全体的視野が必要なのだ。さしあたり、陽のあたらなかつた倭人の立場の復権を強調せねばならない。以上が私の仮説である。

(中略)

まず第一に、倭人をもって、単一の民族かのようにきめこむのは問題である。ふつうの意味での諸民族が、もう次元上のところで、もっとルーズながら、もっと大規模に伝統を共有する。そういう例が世界にはたくさんある。]

(同214ページより) [日本人は劣等感のゆえに模倣ばかりする民族だといった、はなはだ月並みでしかも根強い意見がある。そこに一面の真理を認めるとしても、それだけではたぶん本当のところは見えてこないであろう。文化のパターンには、自己主張ばかりする凸出型の文化の他に、倭人文化圏のような凹み型の文化もあるのかもしれない

のだ。そうして日本の庶民層にはその底流がある。これが他の諸条件と相俟って、今日世界の諸文化のルツボとなり著しい文化成長の先頭に立っている日本の、その謎のひとつなのかもしれない。]

(同344～345ページより) […一度ぐらゐは陸界と水界を、陰画と陽画のように焼き替えて見た方がよい。そうすると、日本・韓国・台湾・香港・シンガポールなどがNICS諸国としてまとまって見えてくるだろう。ホフハインズらがいうような儒教文化圏ではないのだ。いわゆるNICSに日本をも一枚加えて、よく見よ。これは現代における倭人文化圏なのだ。そうして、国際不景気のあるたびに、それを境に相対的に繁栄してゆくのがこの倭人文化圏であり、相対的に沈下してゆくのがその他の既成文明圏なのである。だから倭人共通伝統圏というのは、遠い昔にだけ意味のあったものではなく、近い将来にますます重みを増すだろう存在なのである。]

(同362～363ページより) […このような生きる姿勢の探検のためにもその母胎ともいふべき生態史的パターンの多様性はもっと探検されるべきであろう。その一例としても、私は倭人世界について「凹み型の文化」という考えを提案してみた。

なぜ湿潤熱帯である東南アジアが、高等宗教という一指標だけでは、一見モザイクなのか。ヒンズー教・テラヴァーダ仏教(南

伝仏教)・北伝仏教・イスラーム教・儒教・カトリック教などが、入り乱れている。それは東南アジアが「何も持っていなかった」からではなく、実は共通して凹み型の伝統をしっかりと持っているからであるのかもしれない。そこにわれわれは、価値ある将来の宝物を見いだせるのかもしれないのである。]

(や) [米国も、中国も、再びの大不況への突入が予想される今、日本のバブル崩壊前の、川喜田師による東南アジア観に、再注目することは、とても有意義ではないでせうか。しかも、最後の指摘にあるやう、〈超近代開拓運動〉として、各宗教を相対化させていただく、最初の実験場ともなりうる。]